

旧核融合フォーラムにおいて、平成 14 年度から平成 18 年度まで実施した活動や掲載などをご覧いただくため当面の間表示します。該当する最新の内容については、核融合フォーラムの発展継承となる [核融合エネルギーフォーラム](#) のホームページからご覧下さい。

## ○開会挨拶(運営会議 議長:佐藤文隆)

お忙しい中、お集まりいただき、感謝している。第4回の全体会合ということで、前回の全体会合では既にITERとBAがスタートしていたのだが、国内の実施体制については、これからまだ役所を含めて動きがあるという状況だったため、新しい事態に応じた核融合フォーラムのあり方については、一年のばして今回提起しようと申した記憶がある。今日、いろんな関係の方から、その後の国内での実施体制のいろんな動きがだんだん固まってきているという報告を聞けるのだと思う。そういう状況を踏まえて、今日の全体会合の終わりの方では、この核融合フォーラムの改組拡大というか、一つは名前を核融合エネルギーフォーラムに変えようかという提案、あるいは、ITER・BAもまさに実施段階になるので、それに応じた学会、研究者、産業界の、役所に行く手前でのいろんな意見交換、議論をするような場として、核融合フォーラムに期待されている役割は引き続き重要になってきているわけだが、その辺を、今日の最後の議題の中で、香山先生から提案していただくことになると思う。

そういうことで、核融合フォーラムのスタートのときには、まだ混沌としたような感じの時もあり、このフォーラムの役割にはITERの国内誘致に向けた応援団という面があったのだが、去年あたりから実施が決まって、とくに日本側が準ホストみたいな重要な役割を担うという形で決着をみた。それに伴って、今日もあとでいろんな話があるのだろうが、先ほどの吉川元原研理事長の話(「グローバルエネルギー国際賞」受賞記念講演会)にもあったように、やはり、これは、非常に国際的に巨大な、かつ、参加極がますます多極になってきたというような、しかも基礎科学のプロジェクトではなく、すぐあとに産業につながるかもしれないという技術開発を含んだような、これまでにない、一つの科学技術の世界でのインターナショナルな仕組みのテストあるいは挑戦になっていると思う。

それに伴って、一見、雇用の話とか、いろんなことが出てくるようで、研究を進める上でのややこしさもあり、そんなことだったら一国でやっておけば良かったというような場面もあるのではないと思う。しかし、そういう見方というのは、このITER全体が目指していたものを見落としていると思う。ITERは、そういう巨大な科学技術がらみのことを各国が共同してやっていくという試みであり、それは単にお金がないから共同するというのではなく、外交や世界平和などのいろんな意味から共同で作業していくのであって、ユネスコとか国連とかが目指していたような、世界が共同していろんな環境問題でもなんでも解決していくという、一つの精神運動という側面があるのだと思う。

したがって、実際、研究の中味以前の仕組みを作る段階で、いろんな難問奇問が発生するようだが、そういう新しい、これからITER以外にも波及していくかもしれない国際共同開発研究の仕組み作りにも挑戦しているのだと、ヨーロッパと日本国内の研究者だけではなく、社会にも、そういう面を訴えていく必要があるのではないか。また、支持をもらっていく必要があるのではないか。ITERは、一つの新しい科学技術のあり方への挑戦であると私は思っている。これは、もちろん、先ほど、原子力機構の岡崎副理事長が言われたように、エネルギー問題についての挑戦の場であることが前提なのだが、枠組み作りということ自体が一つの挑戦であると思う。

そういうことで、核融合フォーラムが役所と研究者の中間にある組織だという点が大事であるという認識をもっている。今日は、終わりの方で、そういうことについて、みなさんの意見をいろいろ出していただき、時期的にも次の運営会議の中で、そういう方法を取り入れ、改組していくことになるかと考えている。今後ともよろしくご協力をお願いしたい。